

## 稲作

### 令和7年稲作総括版

#### 気象概況

令和7年も極端な気象が相次ぎましたが、適切な管理が行われたことから、作況単収指数は103となり、近年の中でも良好な作柄となりました。

気象を振り返ると、気温は下図のように、5月には一時的な低温があるなどしましたが、期間を通して高温傾向で経過しています。

降水量は、春先には断続的な降雨があり、ほ場が乾かない状況がありました。打って変わって、7月には少雨による干ばつがあったほか、8月以降は大雨が幾度となくあり、仙北市では河川氾濫などの被害が発生しました。

日照時間は、期間前半は寡照となる期間がありましたが、7月以降は平年以上の日照がありました。

#### 生育概況

##### (1) 育苗期

4月の降水量は多く、日照時間はかなり少なくなりました。また、気温は高く経過しましたが、降水量が多くなったことからほ場の乾燥が進まず、耕起作業は平年より遅れました。

管内の播種作業(盛期)は4月24日(平年差早1日)で平年並となりました。

令和7年は高温障害による出芽不良等は少なくなりましたが、育苗期間中は日照が不足したことから草丈はやや短めに推移しました。また、換気が不十分で加湿傾向となったハウスではカビによる立ち枯れ症状が確認されました。

##### (2) 田植期〜分けつ期

管内の田植え作業の盛期は5月25日(平年差遅1日)で、期間中は断続的に降雨がみられましたが、概ね作業は順調に進みました。

5月4半旬〜6月1半旬の気温は平年より低く、日照時間は少なくなりました。また、田植え日翌日からの移動平均気温の推移では、5月17日以降に田植えしたほ場では平年より気温が低く経過したこと、活着までに時間を要したことで葉数の進展や分けつ発生が緩慢になったと考えられました。

6月25日の定点調査結果(あきたこまちR、10地点平均)は、草丈は41.2cmで平年より長く(平年比117%)、茎数は372本/m<sup>2</sup>(平年比91%)で少なく、葉数は8.7葉(平年差+0.1葉で平年並でした。葉色(SPAD値)は45.4で平年よりやや濃く(平年差+1.4)なりました。

6月以降の気温はかなり高く経過し、日照時間は平年並に経過したこと、遅れていた分けつ発生が促進されるなど生育は回復傾向となったものの、最低気温が高く気温の日較差が小さくなったことや6月末の日照不足により茎数の増加は緩慢となりました。

また、6月下旬は最低気温が高く、日照時間が少なかった影響により草丈が伸長しました。

##### (3) 幼穂形成期〜減数分裂期

東北地方では6月23日(平年差8日遅)に梅雨入りしたものの

7月は気温がかなり高く、降水量はかなり少なくなりました。地域によっては用水不足で中干し以降の灌水管理が十分にできず、干ばつ傾向となりました。

7月15日の定点調査結果(あきたこまちR、10地点平均)は、草丈は73.9cmで平年より長く(平年比117%)、茎数は455本/m<sup>2</sup>(平年比88%)で少なく、葉色(SPAD値)は41.6で平年並(平年差-0.3)でした。

多くの地点で幼穂形成期を過ぎていたことから、この時期の生育栄養診断では草丈が長く、葉色が濃いほ場では、N型やV-2型に分類される地点が多くなりました。

一方で、高温多照の気象経過により、幼穂形成期以降に急激に葉色が低下するほ場があり、状況に応じて追肥が実施されました。

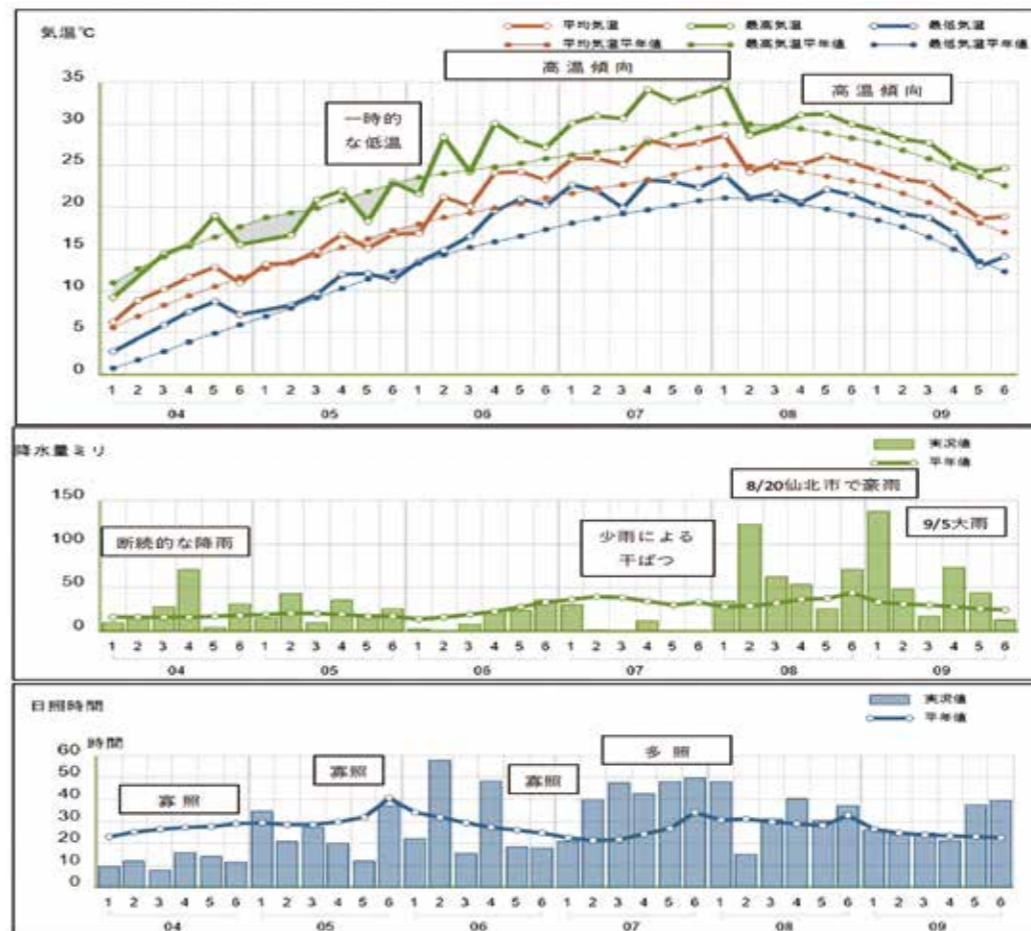
##### (4) 出穂期〜成熟期

7月の気温がかなり高く推移した影響により7月中に走り穂が見られるなど、出穂期は7月31日で平年より2日早まりました。

本年は茎数が少なかったことによる補償作用の他、減数分裂期以降の葉色が維持されたことから一穂粉数が多くなりました。

出穂期以降は高温で経過し、登熟は順調に進み成熟期が早まったことから収穫作業の始期

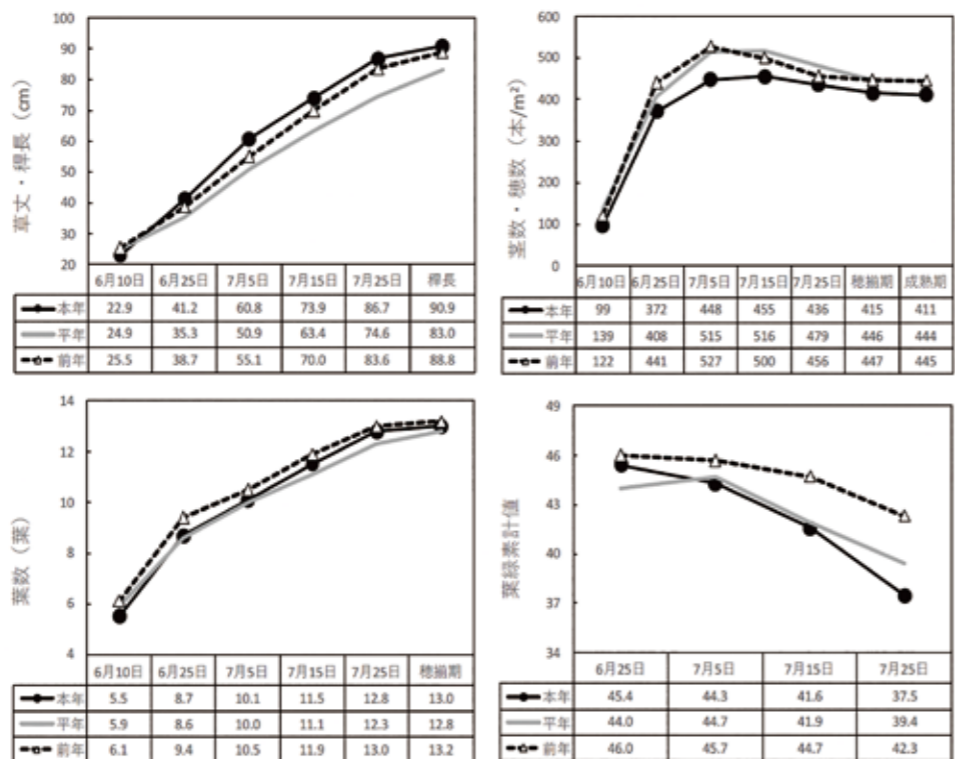
令和7年 気象経過(アメダス:大曲)



R7年4月〜9月の半旬ごとの気象経過(秋田県農業気象システムより引用)

は9月12日(平年差早6日)と早まりました。

この他、出穂期以降は気温が高く、降水量が多くなったことで穂いもちの発生が散見されました。



水稲定点調査における生育経過(あきたこまち10地点平均)

#### 作柄概況

##### 「103」 県南地域の作況単収指数は

令和7年12月12日に東北農政局が公表した令和7年産水稲の10a当たりの収量(ふるい目幅1.90mm)は、全県559kg/10a、県南576kg/10aであり、作況

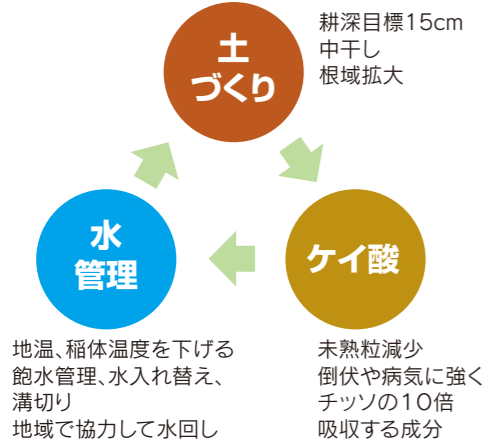
##### 水稲定点調査ほの収量及び収量構成要素(あきたこまちR10地点平均)

単収指数は全県及び県南いずれも「103」となっています。

水稲定点調査ほ(あきたこまち10地点平均)における収量構成要素では、m当たり穂数は411本



このページは秋田県農業共済組合との共同発行です。



**1 高温対策に向けて**

高温対策の大きな三つの柱は、「根の活性維持」、「ケイ酸補給」、「水管理」です。

この三つはどれか一つが欠けてもなりません。根が土中で広く深く張って、養水分をしつかりと吸収でき、稲体がシャキッと直立し日光を浴びて光合成ができるように、水管理でサポートします。

近年は、地球温暖化による高温や大雨被害の頻度が高まっており、気象変動のリスクを回避するためには基本技術の励行と併せて、対応技術の課題を整理し、次年度に向けた対策を見直しましょう。

令和8年に向けて

**品質について**

管内の1等米比率(水稲うるち米)は95.5%で前年より高く、着色粒及び形質による落等が見られる他は品質は良好となっております(農業振興普及課調べ、12月末現在)。

本年は、生育期間を通して茎数が平年を下回って推移し、穂数不足が懸念されましたが、一穂粒数が増加したことで、m当たり穂数が多くなりました。

また、m当たり穂数が多い場合は条件によっては登熟歩合の低下による未熟粒や充実度不足が懸念されますが、本年は登熟期間が高温で経過したことや倒伏が少なかったことで登熟歩合が高くなった他、千粒重が大きくなったことで、収量の増加につながったと考えられました。

(平年比93%)で少なくなりましたが、一穂粒数は80.0粒(同比115%)で多くなったことから、m当たり粒数は32.6千粒(同比107%)と多くなりました。千粒重は23.2g(同比102%)と大きく、登熟歩合が90.0%と平年より4.7ポイント高くなったことから、水稲定点調査ほにおける収量(ふるい目1.90mm)は603kg/10a(同比104%)で多くなりました(表1)。

初期生育確保のための三管理

- 1 健苗育成**  
計画的かつ柔軟な育苗管理を。
- 2 適期田植え**  
栽植密度は70株/坪以上を基本として、1株当たりのかき取りは3~4本を目安に実施。
- 3 水管理**  
みず無視管理とならないように、気象、気温、稲体に合わせた水管理を。

本田の水管理は、安定した作柄を確保するため非常に重要な技術です。活着後は温暖な日に浅水、寒い日に深水とすることにより、水温・地温を高めて初期生育の確保に努めましょう。時折、土中のガス抜きのための水入れ替えや飽水管理を実施します。中干しは遅くなりすぎないように実施します。中干し終了後は間断かん水を行い、土壌を酸化条件にし、根の伸長を促進します。

**2 適正な初期生育量の確保**

初期生育が十分に確保できず、穂数不足による収量減少という事例が近年多くなっています。

健苗を適期田植えするためにも、田植え前から逆算して播種、催芽、浸種の日程を決めます。加えて、苗が老化苗とならないように、田植え前には育苗追肥を実施し、田植え後の気象変化に負けない元気な苗を使用しましょう。また、疎植小苗となっていないか再確認をしましょう。

3 生育中期の適正な施肥管理

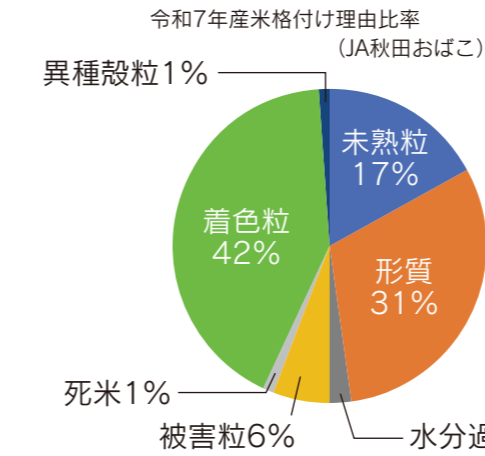


表1 水稲定点調査における収量調査結果(あきたこまち10地点平均)

	稈長 cm	穂長 cm	玄米重 kg/10a	穂数 本/m <sup>2</sup>
本年(R7)	88.0	18.9	603	411
平年比(%±)	108%	107%	104%	93%
前年比(%±)	102%	106%	104%	92%
	一穂粒数 粒/穂	m <sup>2</sup> 当たり粒数 千粒	登熟歩合 %	千粒重 g
本年(R7)	80.0	32.6	90.0	23.2
平年比(%±)	115%	107%	+4.7	102%
前年比(%±)	115%	106%	+2.6	105%

※玄米重はふるい目1.9mm、水分15%換算した値

**1 いもち病**

本田におけるいもち病の発病の主因は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。前年の稲わら・籾殻を育苗施設付近から撤去しましょう。適正かつ効果的な種子消毒、育苗期いもち病除去で、本田への持ち込みを最小限に抑えることが重要です。

**2 斑点米カメムシ類**

斑点米の発生防止対策としては、出穂期後の適期薬剤防除と併せて水田内のノビエやカヤツリグサ科雑草の防除を徹底することが重要です。雑草対策は斑点米対策と構えて、水田内や畦畔の雑草対策のほか、地域でまとまって農道・畦畔・休耕田等の除草をすることは斑点米カメムシ類の発生密度を低下させる効果があります。

**3 生育中期の適正な施肥管理**

生育中期の施肥管理は、理想とする生育量と比較する生育栄養診断により適切に実施し、追肥の要否や施肥量の判断を行います。ほ場間のバラツキが大きい場合や中干し以降の葉色低下がある場合は、ほ場ごとに適期に生育・栄養診断を実施して対応しましょう。

4 病害虫の発生状況

**(1) いもち病**

BLASTAM法(アメダスデータを用いた葉いもち発生予測プログラム)において、6月15~16日、23~28日に全県的な感染好適条件や準感染好適条件が確認されました。大仙市では6月30日に最初に病斑が確認されました。本年の全般発生開始期は7月1日(平年7月6日)でやや早くなりました。

**【葉いもち】**

7月以降に感染好適な気象はほとんど出現していなかったものの、気温日較差の大きい日もあったことから、稲体が結露し、感染に好適な条件となっていたほ場もあったと考えられます。そのため、全般発生開始期の病斑密度の高いほ場を中心に、穂ばらみ期の発生量はや多かったと考えられます。

**【穂いもち】**

8月上中旬の降水量が多い(かなり多かった)ことから、葉いもちの発生量の多かったほ場を中心に、感染好適条件となり、乳熟期以降に穂への感染・発病が拡大したことで収穫期における穂いもちの発生量は多くなったと考えられます。

**(2) 紋枯病**

7月の気温はかなり高かったものの、降水量がかなり少なかった

**(3) こま葉枯病**

近年、本病の発生は認められていませんでしたが、カドミウム低吸収性品種はマンガン吸収能が低く、こま葉枯病が発生しやすくなることから、管内での発生が心配されました。ただ、管内では、上位葉での病斑がまばらに見える株はあったものの、穂枯れ症状は確認されませんでした。

**(4) 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ)**

斑点米カメムシ類の発育に好適な環境が多かったことで越冬し第2世代までの発生は、早く多い傾向でした。ただ、乳熟期以降は発生量が少なくなり、割れ籾率が平年並だったため、斑点米の発生量はや少なくなったと考えられます。

斑点米混入率が高かったほ場では、水田内雑草が多く、すくい取り数も多くなりました。

ことから、穂ばらみ期の発生量は平年並になったと考えられます。穂ばらみ期の発生量が平年並で、全県の出穂期(7月31日)以降、8月の気温はかなり高く、降水量はかなり多く、発病に好適な環境となりましたが防除が行われたため、収穫期の発生量は平年並になったと考えられます。

**いもち病の防除徹底を!**

前年の稲わら・籾殻 育苗施設周辺に放置しない

種子消毒・育苗期防除の実施

箱処理剤の施用

状況に応じて オリゼメート粒剤の本田施用

こまめなほ場確認で 早期発見早期防除

**斑点米カメムシ類の防除徹底を!**

いつやる?

追肥による生育調整

日頃の観察が基本のキ!

稲体の変化をキャッチ 柔軟に対応する

幼穂形成期・減数分裂期 生育・栄養診断

幼穂形成期以降、葉色の低下がある場合は追肥を検討

高温登熟に耐えられる 葉色を維持させる

カドミウム汚染米が発生する恐れがある地域で、「あきたこまちR」以外の品種では、これまでと同様に、出穂前後3週間、計6週間は、湛水管理を必ず実施しましょう。

出穂期10日後頃 薬剤防除(1回目) ※地域による防除をお願いします。

出穂24日後頃 薬剤防除(2回目) ※使用薬剤の収穫前日数に注意

**5 カドミウム汚染米対策**

カドミウム汚染米が発生する恐れがある地域で、「あきたこまちR」以外の品種では、これまでと同様に、出穂前後3週間、計6週間は、湛水管理を必ず実施しましょう。